

的で遊戯的な「軽さ」や様式化された「美」が固定化する
危惧はあったはずだ。詩に「新しさ」を希求する詩作のな
かでは特に。

この土地は、リアリストの眼で「社会的現実」に寄りそつ
た抒情詩人中野重治も生まれ育ったところでもある。三好
達治は、西欧の詩と出会って、伝統的な日本の詩への反省
や批評の視点から両者の詩の統合を試みた。

荒川洋治は、こうした風土と言葉を背景に、日本の伝統
的な言葉と現代の口語の比較との批評の上に詩を生みだし
た詩作者である。荒川の批評精神の源は、ここにある。

ポストコロナの 可能性としての

「女子たち」

①はじめに

呪いを解く鍵はどこにあるのか？

池上貴子

ウイルスが時代の幕を開ける

感染の猛威をふるった新型コロナウイルスが、「ポスト
コロナ」と呼ばれる時代を開きつつある。ウイルスは私達
から多くを奪ったし、今後も奪うだろう。その最たるもの
はグローバリゼーションだと言う人もいるだろうが、奇し
くもウイルスは全世界に広がったわけであり（独裁国家の
「感染者なし」報告ものともせず）、究極のグローバリ
ゼーションを体現してのけている。人間の情が全く通用し
ないウイルスという存在を前に、築き上げてきた社会的通
念や倫理が脆くも崩れ去った跡を眼差しているのが、私た
ちの現在ではないか。

WHOが感染を防止するために互いに空けるべき距離を、「ソーシャル・ディスタンス（社会的距離）」から「フィジカル・ディスタンス（身体的・物的距離）」へと名称変更したが、それはつまり、もはや社会的差異ではなく、個人の生活の問題であり、今後は公的問題として個の領域に踏み込まれることを意味している（社会的な貧困が三密の領域を作る場合も、その問題は改善されないまま、感染者という個人のウイルス対策に視点はそそがれる）。そのため、世界的なウイルスの蔓延は個人の生活を大きくシフトチェンジさせるだろう

一方で社会システムは大きく後退するかもしれない。未曾有の規模で行われた国境封鎖や入国禁止に伴う輸出入の停滞が、世界中の経済に大打撃を与えてくると、日本政府が三密の禁止令を国が罰則つきで発令するまでもなく、メディアの露出や社会的サービスが〈自粛〉の形で調整されていった。このように、流通・交通・交流といった運動が止まる危機的状况が発生すると、表層的な社会的通念や倫理といったメッキが削りとられ、〈生産性〉という名の地金が露出し始めることを考えておく必要があるだろう。

二〇一〇年代の生産性問題を文学で考える

生産性は対抗的に扱う概念ではないが、文学はそれを相対

化することで、人間の営みに極めて重要な余剰を作ることができる。たとえば、作家の平野啓一郎が二〇一九年十一月二三日に合同文学会で行った基調講演「文学は何の役に立つのか？」は、率直な問いかけからなる文学論であり、生産性と文学の関係性についての真摯な応答であったといえる。

その講演録によれば、平野は二〇〇〇年代いわゆるゼロ年代と、東日本大震災以降の一〇年代では、〈役に立つ、立たない〉の認識が変わったという¹。いわゆる勝ち組・負け組の二分法で自己責任論がもてはやされたゼロ年代の「消極的な、冷たい否定論」から、一〇年代には「熱い、積極的な否定論」に変わったというのが平野の説である。

東日本大震災直後の「絆ブーム」による国民一体感の強調とナショナリズムの昂揚はよく言われることだが、平野の説が興味深いのは、それらに加え、国民による財産問題とコスト意識への関心の高まりを視野に入れていることだ。一〇年代において、与えられた予算について「使われるべき対象と、使われるべきでない対象とを選別する意識があらゆる所で見えてき」たと指摘し、次のように警戒する。

新自由主義というよりは全体主義的な風潮で、とにかく、選別する、セレクトするという意識が非常に強くなってきました。